

---

# 共同研究の経過と課題

基幹研究「環境利用システムの多様性と生活世界」

---

安室 知

## 1 共同研究のテーマと研究期間

基幹研究「環境利用システムの多様性と生活世界」

(全体課題「農耕社会の形成と環境への影響」)

研究期間：平成 13 年度～15 年度

## 2 研究の目的

人は環境の特性や要素を利用するために、それぞれの生活環境にねざした技術と知恵、すなわち生活技術を発達させてきた。実際に生活技術が運用される場面においては、社会組織や経済システム、資源の所有や管理にかかわる慣行など、さまざまなレベルで環境に適合するための社会的技術が存在する。

とくに、近年、社会的技術をめぐっては、経済のシステムや流通・消費のプロセスといったレベルにおいて変化が著しい。環境問題はとかく科学技術の発達と自然（環境）保全のあつれきという側面から論じられがちであるが、いふなればそこには社会的技術の急激な変化が強く影響しているのであって、こうした視点にたつてこそわれわれは環境問題を身近で現代的な課題としてとらえることができる。また、社会的技術については、環境利用における「人と人のかかわり」の側面が大きく作用することを考えれば、そのなかにこそ現代の環境問題を解決していくヒントが潜んでいると考えられる。

本研究は、生活技術と社会的技術の連関から近現代における環境利用システムの多様性と変容の過程をとらえ、生活の営みと環境が、それぞれの変化を組みこみながら互いを再生産していくダイナミズムを明らかにすることを目的とする。その際、とくに社会的技術の変化が、“人—環境”系にもたらした影響を明らかにすることを重視する。また、近年の状況をふまえて環境正義（environmental justice）の視点に立つことで、経済的、文化的、社会的、環境的に自己決定しうる生活者の論理と実践という観点から、人と環境のかかわりを理解し、現代社会に寄与するための研究方法を追求する。

---

### 3 研究メンバー

(共同研究員)

- ・飯田 卓 国立民族学博物館・生態人類学
- ・内山純蔵 総合地球環境学研究所・民族考古学
- ・内山 節 学識経験者・哲学
- ・小谷真吾 千葉大学文学部・人類生態学
- ・佐野静代 滋賀大学教育学部・歴史地理学
- ・白水 智 中央学院大学法学部・日本中世史
- ・関 礼子 立教大学社会学部・環境社会学
- ・出口晶子 甲南大学文学部・民俗学, 地理学
- ・春田直紀 熊本大学教育学部・日本中世史
- ・日比野光敏 名古屋経済大学短期大学部・民俗学
- ・牧野厚史 滋賀県立琵琶湖博物館・環境社会学
- ・藤森裕治 信州大学教育学部・教育学, 民俗学
- ・室田 武 同志社大学経済学部・環境経済学
- ・吉村郊子 歴博研究部・生態人類学
- 篠原 徹 歴博研究部・民俗学
- ◎安室 知 歴博研究部・民俗学

\*○は平成13年度, ◎は平成14・15年度における研究代表者を示す。

(ゲストスピーカー)

- ・厚 香苗 総研大大学院生
- ・池田光穂 熊本大学文学部
- ・池谷和信 国立民族学博物館
- ・小笠原輝 山梨県環境科学研究所
- ・柏木亨介 筑波大学大学院生
- ・小島孝夫 成城大学文芸学部
- ・齋藤暖生 京都大学大学院生
- ・蘇理剛志 総研大大学院生
- ・大門 哲 石川県立歴史博物館
- ・田村典江 京都大学大学院生
- ・寺田匡宏 歴博COE
- ・橋村 修 歴博外来研究員
- ・葉山 茂 総研大大学院生
- ・三俣 学 京都大学大学院生
- ・宮崎祐介 熊本大学大学院生
- ・渡邊一弘 昭和館

---

\* ゲストスピーカーの所属は基本的に研究会発表当時のものである。

## 4 研究の経過

〈平成 13 年度〉

- ・ 第 1 回研究会 平成 13 年 5 月 19 日 (土), 20 日 (日) 於国立歴史民俗博物館  
研究課題と今後の方針に関する全体討論
- ・ 第 2 回研究会 平成 13 年 7 月 19 日 (木), 20 日 (金) 於国立歴史民俗博物館  
飯田 卓 (国立民族学博物館)  
「コンブをめぐる人と人との関わり —北海道日高地方の漁村を事例として—」  
小島孝夫 (成城大学)  
「潜水漁における熟練 —三重県志摩郡大王町畔名の—海女の生涯漁獲量を事例に—」  
白水 智 (中央学院大学)  
「中世における漁業権とその保証について —近世への展望を含めて—」
- ・ 第 3 回研究会 平成 13 年 10 月 27 日 (土), 28 日 (日) 於国立歴史民俗博物館  
小谷真吾 (歴博COE—当時)  
「伝統的生業生態の定量分析と社会変容に関連した生業システムの変化 —パプアニューギニア高地辺縁部のバナナ栽培を中心とした農法の研究—」  
日比野光敏 (名古屋経済大学短期大学部)  
「スシの話」  
出口晶子 (甲南大学)  
「川辺の生活世界 —現代のサケ川・越後荒川を中心に—」
- ・ 第 4 回研究会 平成 14 年 3 月 16 日 (土), 17 日 (日) 於国立歴史民俗博物館  
寺田匡宏 (歴博COE—当時)  
「歴史学における災害史と環境史研究」  
池田光穂 (熊本大学)  
「エコツーリズムを通してみる自然環境 —コスタリカの事例を通して—」  
安室 知 (歴博)  
「水田漁撈がもたらす社会統合 —滋賀県栗東町大橋ドジョウトリ神事の調査概報—」

〈平成 14 年度〉

- ・ 第 1 回研究会 平成 14 年 5 月 25 日 (土), 26 日 (日) 於国立歴史民俗博物館  
篠原 徹 (歴博)  
「野生と栽培をつなぐ植物たち —海南島リー族の焼畑とその周辺—」  
室田 武 (同志社大学)  
「公, 共, 私 の三領域からなる現代社会 —そこでの共的な資源管理のルール—」  
三俣 学 (京都大学大学院生—当時)  
「財産区有林は日本のコモンズか?」  
関 礼子 (帯広畜産大学—当時)

---

「阿賀野川という自然 —生活文化からかわりの個別化へ—」

- ・第2回研究会 平成14年9月14日(土), 15日(日), 16日(月) 於熊本県阿蘇町  
(研究発表)

柏木亨介(筑波大学大学院)

「阿蘇町湯浦地区における村落空間構造の変化に関する民俗学的研究」

春田直紀(熊本大学)

「阿蘇湯浦郷における環境利用と空間認識」

宮崎祐介(熊本大学大学院)

「近世阿蘇北外輪山における山野利用の実態」

(現地調査)

阿蘇町湯浦地区牧野の巡検

湯浦神社夜神楽の参観

阿蘇神社所蔵文書の閲覧

- ・第3回研究会 平成14年12月21日(土), 22日(日) 於国立歴史民俗博物館  
蘇理剛志(総研大大学院生)

「『地域づくり』とつくられる『伝統産業』 —和歌山県清水町を事例に—」

小笠原輝(山梨県環境科学研究所)

「地域住民の自然との関わり方の変化と生活環境の変化」

吉村郊子(歴博)

「炭焼きとして現代を生きる —三人の個人史から—」

- ・第4回研究会 平成15年3月6日(木), 7日(金) 於国立歴史民俗博物館  
内山 節(哲学, 学識経験者)

「地域における『歴史』の役割について —歴史哲学への覚え書き—」

牧野厚史(琵琶湖博物館)

「環境再生事業における住民参加の意味 —ローカル・コモンズとしての湖岸域の崩壊と再生—」

佐野静代(滋賀大学)

「淡水性潟湖沿岸域における伝統的環境利用システムとその変容—琵琶湖岸内湖を事例として—」

〈平成15年度〉

- ・第1回研究会 平成15年7月12日(土), 13日(日) 於国立歴史民俗博物館

齋藤暖生(京都大学大学院生)

「東日本と西日本にみる山菜・キノコ採りの地域性 —岩手県沢内村と兵庫県旧篠山町の調査を中心に—」

藤森裕治(信州大学)

「昔話の生活世界と畑作地域の生業文化 —『死と豊穡』の生業論理をキーワードに—」

内山純蔵(富山大学)

---

---

『『永遠のトラブルメーカー』としての人間』

・第2回研究会 平成15年9月10日(水), 11日(木) 於国立歴史民俗博物館

田村典江(京都大学大学院生)

「イワノリ採取における採取慣行の仕組み —京都府伊根町蒲入地区の事例から—」

渡邊一弘(昭和館)

「カモの投げ網猟についての歴史的展開の整理」

葉山 茂(総研大大学院生)

「通時的視点からみた共有資源の所有形態の変遷 —長崎県小値賀島の漁業を事例として—」

・第3回研究会 平成15年12月20日(土), 21日(日) 於国立歴史民俗博物館

大門 哲(石川県立歴史博物館)

「潮と藁 —河北潟東南岸域における藁加工の副業化—」

池谷和信(国立民族学博物館)

「日本の山地利用システムと生活世界 —近世後期のクマ狩猟の例—」

橋村 修(歴博外来研究員)

「近世後期五島列島における外来漁業集団の定住化過程と漁業権獲得」

厚 香苗(総研大大学院生)

「露天商の『擬似』擬制的親族集団とナワバリ—東京区部における事例を中心として—」

## 5 研究成果の概要

本研究会において、環境利用システムと生活世界とのかかわりを考えるとき、調査および議論のフィールドとなった空間は、①水辺、②耕地、③海、④山、⑤都市の5つに大きくわけられる。以下では、まず各研究発表の概要とそのときなされた研究会の討論内容について記す。

### (1) 水辺

研究発表「公・共・私の三領域からなる現代社会—そこでの共的な資源管理のルール—」(室田武)では、愛知県瀬戸市におけるフィールドワークをもとに、水車利用について、土地所有・財産・環境利用の諸点から分析した。その上で、公有・共有・私有の形態と資源管理との関係について考察を加えた。

研究発表「環境再生事業における住民参加の意味—ローカル・コモنزとしての湖岸域の崩壊と再生—」(牧野厚史)においては、琵琶湖湖岸域にみられる内湖の利用形態について、フィールドワークをもとに、その経年変化を分析した。とくに、行政主導でおこなわれてきた干拓事業が、湖岸域の持続的利用を崩壊させていく過程に焦点を当て考察した。

研究発表「淡水性潟湖沿岸域における伝統的環境利用システムとその変容—琵琶湖岸内湖を事例として—」(佐野静代)においては、琵琶湖湖岸域の内湖をめぐる生業利用について、文献資料およびフィールドワークをもとに、その経年変化について分析した。とくに、エリ(大型定置陥筈漁具の一種)の所有と利用形態に注目して考察した。

研究発表「川辺の生活世界—現代のサケ川・越後荒川を中心に—」(出口晶子)では、越後荒川

---

におけるフィールドワークをもとに、河川利用の経年変化について分析した。とくに、近年の河川改修と架橋に伴う漁撈活動や渡し舟業の変化について詳細に論じた。

研究発表「阿賀野川という自然—生活文化からかわりの個別化へ—」（関礼子）では、阿賀野川流域におけるフィールドワークをもとに、河川利用に関する諸活動の分析をした。とくに、河川に関わる生業あるいは経済活動の主体が、地域集団から個人へと移行していく過程について考察した。

研究発表「潮と藁—河北潟東南岸域における藁加工の副業化—」（大門哲）においては、河北潟（石川県）でのフィールドワークをもとに、漁撈と新田開発に注目して、大水の利用とそのリスク分散の知恵について概観した。そして、潟湖周辺の低湿な環境が地域住民の副業にとっていかなる意味を持っていたかを論じた。

研究発表「カモの投げ網猟についての歴史的展開の整理」（渡邊一弘）では、鹿児島県各地でおこなわれているカモの投げ網猟について、文献およびフィールドデータをもとに、その歴史的展開を分析した。とくに、その非生産性について言及し、武士の嗜みというステータス、および複合生業論の両面から考察をおこなった。

研究発表「『永遠のトラブルメーカー』としての人間」（内山純蔵）においては、鳥浜貝塚（福井県）や粟津湖底遺跡（滋賀県）といった縄文集落の考古資料を分析し、縄文時代の生業の季節性について考察をおこなった。とくに、日本において牧畜が主たる生業として発達しなかった生態的要因について、イノシシ猟に注目して討論した。

## （2）耕地（水田・畑）

研究発表「野生と栽培をつなぐ植物たち—海南島リー族の焼畑とその周辺—」（篠原徹）においては、中国海南島のリー族に関するフィールドワークをもとに、彼らの多様な生業活動に対する分析をおこなった。とくに、粗放的な栽培にもかかわらず、かえって多様に利用されている草本類について、セミ・ドメスティケーションおよび複合生業の視点から考察を加えた。

研究発表「伝統的生業生態の定量分析と社会変容に関連した生業システムの変化—パプアニューギニア高地辺縁部のバナナ栽培を中心とした農法の研究—」（小谷真吾）では、パプアニューギニア高地辺縁部におけるフィールドワークをもとに、バナナ栽培を中心とした生業システムの変容を分析した。近代化と定住化政策による核家族化の進行によって、サツマイモ栽培が浸透していく動態について考察した。

研究発表「昔話の生活世界と畑作地域の生業文化—『死と豊穡』の生業論理をキーワードに—」（藤森裕治）では、オオゲツヒメ伝説に関する資料および東京都武蔵村山市におけるフィールドワークをもとに、稲作と焼畑をめぐる生業論理について分析をおこなった。とくに、昔話「花咲爺」の分布に着目して、稲作の論理と焼畑の論理の葛藤について考察した。

研究発表「水田漁撈がもたらす社会統合—滋賀県栗東市大橋ドジョウトリ神事の調査から—」（安室知）では、滋賀県栗東市におけるドジョウトリ神事とドジョウズシ作りに関するフィールドワークをもとに、そうした祭祀やナレズシ作りを維持してきた社会組織について分析した。とくに、ドジョウトリ神事に伴う水田漁撈が水利組織の社会統合に果たす役割について検討した。

---

研究発表「スシの話」(日比野光敏)では、日本におけるスシの分布に注目し、その地域性について分析した。とくに、愛知、岐阜、三重にまたがる輪中地帯で生産消費される箱ずしに注目し、スシの生産消費と生業との関連性について考察をおこなった。

### (3) 海

研究発表「潜水漁における熟練—三重県志摩郡大王町畔名の一海女の生涯漁獲量を事例に一」(小島孝夫)においては、三重県大王町でのフィールドワークと発表者が自ら収集した海女の日記をもとにして、約半世紀にわたる漁獲量の経年変化を海女のライフヒストリーと対応させながら分析した。そして、海女の生業活動についてその歴史性を考察した。

研究発表「コンブをめぐる人と人との関わり—北海道日高地方の漁村を事例として—」(飯田卓)においては、北海道日高地方におけるコンブ漁に関するフィールドワークをもとに、「旗揚げ」制度による漁場管理について分析をおこなった。漁場の持続的な管理と、個人の収益の最大化との葛藤が、漁場利用のタイミングを決定する「旗揚げ」にどのように表象されるか考察した。

研究発表「イワノリ採取における採取慣行の仕組み—京都府伊根町蒲入地区の事例から—」(田村典江)では、京都府伊根町蒲入地区におけるイワノリ採取に関するフィールドワークをもとに、採取慣行に関する分析をおこなった。とくに、安全確保とイワノリ資源の持続的利用を目的とする採取禁止慣行について論じた。

研究発表「通時的視点からみた共有資源の所有形態の変遷—長崎県小値賀島の漁業を事例として—」(葉山茂)では、小値賀島(長崎県)におけるフィールドワークをもとに、漁場の所有および使用形態とその変遷について、漁獲対象の経年的変化を追いながら、コモンズ論に引きつけて分析した。

研究発表「中世における漁業権とその保証について—近世への展望を含めて—」(白水智)においては、発表者自身が収集した中世日本における漁業権に関する史料をもとにして、中世と近世における保証制度の連続性と差異について考察した。

研究発表「近世後期五島列島における外来漁業集団の定住化過程と漁業権獲得」(橋村修)では、五島列島(長崎県)の近世漁業文書を用いて、出漁漁民や移動漁民といった外来漁業集団が五島列島への定着と漁業権獲得をおこなった背景について、藩政とのかかわりおよび資源管理の問題に注目して分析した。

### (4) 山

研究発表「財産区有林は日本のコモンズか?」(三俣学)では、滋賀県と岩手県における財産区有林の使用形態に関するフィールドワークをもとに、そのコミュニティによる運営について分析をした。その上で、両者の運営形態と生産について比較し、コモンズ概念の再検討を試みるべく討論をおこなった。

研究発表「阿蘇町湯浦地区における村落空間構造の変化に関する民俗学的研究」(柏木亨介)では、阿蘇町湯浦地区における民俗調査をもとに、阿蘇外輪山のなかにある一農業集落の民俗空間構造について、自然地形・土地利用・社会組織・信仰物の分布を重層的に捉えて分析した。

研究発表「阿蘇湯浦郷地域における環境利用と空間認識—近現代と中世を比較する—」（春田直紀）においては、阿蘇家文書の分析から、中世（13世紀）の湯浦郷における環境利用と空間認識の復元を試みた。具体的には、水利慣行・土地利用・地名に注目した。また、現代における民俗調査の成果から現代との比較をおこない、とくに住民による山林原野利用の変遷を論じた。

研究発表「近世阿蘇北外輪山における山野利用の実態—内牧手永湯浦村を中心に—」（宮崎祐介）においては、永青文庫（熊本大学）の分析から、近世における北外輪山の草原利用について、藩による植林と水源涵養政策、住民による緑肥や牛馬飼料の採集および狩猟活動について具体的に明らかにするとともに、その重層的構造の解明を試みた。

研究発表「東日本と西日本にみる山菜・キノコ採りの地域性—岩手県沢内村と兵庫県旧篠山町の事例調査を中心に—」（斎藤暖生）では、岩手県沢内村と兵庫県旧篠山町におけるフィールドワークをもとに、キノコ採取の地域性についての分析をおこなった。その上で、複合生業論の議論を援用しながら、キノコ採りを含む採集活動の意義について考察した。

研究発表「日本の山地利用システムと生活世界—近世後期のクマ狩猟の例—」（池谷和信）においては、クマ狩りに注目して日本における山地の資源利用と資源管理について論じた。とくに日本における近世後期の山村経済の様相、アジアにおけるクマの商品化、現代社会における自然保護とのかわりといった点に注目し、山地農民の狩猟文化について動態的な把握の必要性を説いた。

研究発表「地域住民の自然との関わり方の変化と生活環境の変化」（小笠原輝）においては、山梨県下での害獣に関するフィールドワークをもとに、産業構造の変化に伴う環境変化と地域社会の関係について分析をおこなった。とくに、猿害およびイノシシの害が放棄された田畑で多発する事例に注目し、環境管理の重要性について考察した。

研究発表「炭焼きとして現代を生きる—三人の個人史から—」（吉村郊子）においては、和歌山県下のフィールドワークをもとに、3人の炭焼き職人のライフヒストリーについて分析をおこなった。その上で、炭焼きをめぐる昨今の状況変化とライフヒストリーの対応関係について考察した。

## (5) 都市（および現代社会）

研究発表「地域における“歴史”の役割について—歴史哲学への覚え書き—」（内山節）においては、発表者自身がプロデューサーとしてかかわった「第16回国民文化祭，群馬2001」を事例として、多層的な共同体が一体性を獲得していく過程を、共有される“歴史”の視点から考察した。

研究発表「歴史学における災害史と環境史研究」（寺田匡宏）では、歴史学における災害史および環境史研究の動向を報告した。その上で、阪神大震災に注目し、現実の災害を題材とすることで、歴史学における災害史・環境史研究の動向はどのように変化すべきか考察した。

研究発表「露天商の“擬似”擬制的親族集団とナワバリ—東京区部における事例を中心として—」（厚香苗）では、東京都区部のテキ屋に関するフィールドワークをもとに、“擬似”擬制的親族集団とナワバリとの関係について論じた。複数のナワバリが重層するアイニワ状態における葛藤回避のあり方について考察した。

研究発表「『地域づくり』とつくられる『伝統産業』—和歌山県清水町を事例に—」（蘇理剛志）では、和歌山県清水町におけるフィールドワークをもとに、和紙づくりのような伝統産業が現代に



---

において再興してくる過程をフォークロリズムの視点から分析した。

研究発表「エコツーリズムを通してみる自然環境—コスタリカの事例を通して—」（池田光穂）においては、コスタリカおよびパナマを中心としたエコツーリズムに関するフィールドワークをもとに、自然イメージが政治的および歴史的に構築される過程を分析した。とくに、熱帯生態学の言説がイメージ構築に果たした役割に焦点を当てて考察をおこなった。

以上をまとめると、本共同研究の特徴として以下の3点を挙げることができる。

まず第1点は、歴史学・考古学・民俗学にとどまらず、人類学・経済学・社会学・地理学・教育学・哲学といった幅広い専攻の研究者が参画し、環境利用のあり方と生活世界とのかかわりについて学際的な討論を目指したことである。第2点目は、生活者の視点を重視するために、現実に農山漁村に暮らす人々を対象としたフィールドワークの成果にもとづいた討論をおこなったことである。第3点は、研究目的のひとつに環境正義（environmental justice）として掲げたとおり、環境問題など具体的な課題にも目を向け、現代社会に寄与する研究を目指したことにある。

そうした共同研究会のもと、共同研究メンバーの提示する詳細なフィールド・データをもとに、山・海・水辺・耕地・都市といった空間（生活領域）が住民にいかに関係され、また利用されてきたかを具体的に論じることができた。

そのとき、在地に暮らす人と自然との関係をもっとも直接的に体現する“生業”は本共同研究の分析および議論の対象として、とくに重要な意味を持つことになった。そのため、本共同研究会では、水田稲作、焼畑、バナナ栽培、エリ漁、潜水漁、コンブ漁、サケ漁、カモ猟、クマ猟、キノコ採集、イワノリ採集、炭焼き、紙漉、テキ屋などさまざまな生業技術について、より具体性をもってモノグラフ的検討をおこなうことを議論の前提としてまずはじめにおこなった。

その結果、生活世界にみられる環境の多様なあり方は、生活者がさまざまな“生業”により当たり前の暮らしを営むことで守られてきた面が大きいことが、あらためていくつものケース・スタディーを通して明らかとなった。現代の環境思想にあるワイズ・ユース（wise use）の考え方に通ずるものである。また、現実に多様な生業が存在し、それが総体として生活世界を構成しているということは、環境利用システムの柔軟性を示すものであり、人と自然との多様な関係性の中に現実の生活世界は形成されていることを示しているということができよう。そう考えれば、人と自然との多様な関係性を絶ち切り、多くの生業の存在基盤を揺るがしているのが、現代における広義の環境問題であると捉え直すことは可能であろう。

なお、以下に掲げる16編の論文は、上記のような共同研究会による集中的な討論を経た後、本共同研究メンバーが各自の研究をさらに進化させたものである。そのため、研究発表がそのまま報告論文になっているわけではないことをあらかじめ断っておく。

3年間の共同研究の成果として編まれた本報告書は、環境問題等の現代的課題に対する直接的な解決策にはならないものの、そうした問題を経済や科学技術の面からだけでなく、歴史的・文化的な面から考えるときの基礎資料として社会的な意味を持つてくると考える。この点は本共同研究のひとつの成果であると考えられる。

また、反省点としては、途中で研究代表者が交代したこともあり、3年間の研究期間を通して一

---

---

貫性のある研究会の運営ができなかったことがあげられる。さらには、現代社会がかかえる具体的な課題に対してよりいっそうの接近をはかり、その解決の手だてとなる具体的手法を、研究会としてはもっと議論し模索すべきであったという反省もある。この点は今度の課題として残される。

(国立歴史民俗博物館研究部)